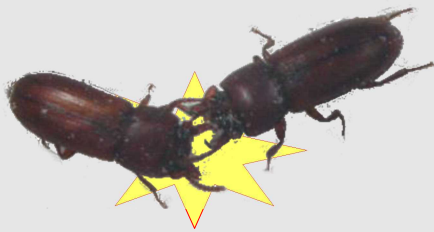


第42回

つくば進化生態学セミナー

勝てなくても、糧になる！



日 時

7/24 (木) 16:30~18:30

場 所

筑波大学 総合研究棟 A205号室
(最寄りのバス停は"筑波大学中央")

岡田 賢祐 (岡山大・院・環境生命)

オオツノコクヌストモドキにおける負け癖の適応的意義

多くの動物で餌や配偶相手など限られた資源をめぐる争いが観察されている。個体は生涯を通して何度も闘争を経験し、その経験がしばしば次の闘争に影響することがある。古くから、勝利を経験した個体は次の戦いの勝率が上がり(勝ち癖)、敗北した場合はその逆になることが(負け癖)、幅広い分類群で報告されている。この現象は二つの仮説で説明できることが提案されている(ただし、両者は排他的ではない): 1つは、個体が闘争経験を基に自身の行動を変える(self-assessment hypothesis); もう一方は、匂いなどの手がかりから、個体が対戦相手の闘争経験を判断し、行動を変える(social-cue hypothesis)。具体例を挙げると、前者は記憶や学習による行動の修飾であり、後者は対戦相手の過去の闘争による外傷や出血を判断材料にして、個体が行動を変えることである。ここでは、オオツノコクヌストモドキのオスを例として、どのように闘争経験による行動修飾が適応度に影響するか議論したい。本種のオスは大きな大顎を持ち、メスをめぐる戦いをするが、メスには大顎はない。勝利経験は次の対戦の勝率に影響を及ぼさないが、敗北経験から4日間、オスの勝率は0%近くまで下がるということが分かっている。最初に、敗北後にどのような行動修飾が起こるのかを調べた。次に、なぜ修飾時間が4日間なのか理論的に検証するとともに、敗北経験がオスの繁殖戦術に影響を及ぼすかを調査した。さらに、敗北経験による行動修飾の生理的・遺伝的基盤についても報告する予定である。

香月雅子 | katsuki@pe.ska.life.tsukuba.ac.jp

沼尻侑子 | numajiri@pe.ska.life.tsukuba.ac.jp

高橋 玄 | s1421010@u.tsukuba.ac.jp

終了後に懇親会も予定しております
どなたでもご参加いただけます